

## リモ・コン先生

著者	下沢 勝井
雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	113-115
発行年	1980-02-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019281">http://hdl.handle.net/10114/00019281</a>

ポート提出に行った時、私が中学と大学で二度も教わった水野清先生にお会いして、近藤先生が出獄され、大学に出られるということを書いた。その時私は、先生を慕って再び学部へ進学することに心をきめた。

先生の授業は、旧六角校舎内にあった国文研究室で行なわれた。西鶴の諸国咄の輪読であった。

戦後の先生は、婉曲な表現をぬぐい去り、魚が水を得たような生氣と、持前の率直さとをとりもどされた。それは鵜月洋や桑原武夫との激しい論争を展開していくエネルギーにも現わされていた。

先生は、特に理論と実践の統一について、厳しく言われることが多かった。私も間もなく政治運動に加わり、学問との統一を心がけるように努めた。二・一ストや中野重治の参議院選でも走りまわった。友人の中には職業革命家になったものまで出た。

先生の学生への影響力は、非常に大きかった。かげでは「近忠さん」という愛称で呼ばれていた。そしてつねに私たちの第二の父として、人生相談まで担当なされていたのだ。先生は日本文学協会を設立されるなど、大変な組織力をもっておられた。しかし、足もとの法大国文学会が、戦争により破壊されたままなので、早くその再建をするように、お会いするたびに尻をたたかれたものである。

日文科の学生も増え、学会費も豊かになり、やっとのことで、念願の誌要の再刊や総会や研究発表会なども開いて軌道にのったと思ったが、これまた学園紛争で破壊されてしまった。先生のことだか

ら、さぞあの世でいらいらなさっているのではないだろうか。早く国文学会の再々建をして、今まで以上に発展させていくことこそ、私たちが先生の御冥福を願う唯一の道であると思っている。そしてそれは勿論、私たち自身のためであることは言うまでもない。いかなる権力の抑圧にも屈せず、古武士のように純粹に自己の信念を生きた人は、先生である。

ふと挫折感にとりつかれるような時に、よく先生の毅然とした生き方を思い起しては、腑甲斐ない自分自身の姿勢を正すことがしばしばある。そのたびに、先生の心がさまざまのかたちで、私たちの心に生きていることを知らされる。

私たちにとって先生は、偉大な啓蒙思想家の一人だったと、今でも信じている。

リモ・コン先生

下 沢 勝 井

「私は教師ではない。あなた方と研究を共にする一学徒です。同

志です。だからどうか私を先生とは呼ばないでほしい」

と近藤忠義先生はいわれる。だから私たちは、先生が前にいないときにはへコンチュウさんへ先生を前にするとへ近藤さんへと呼びした。「……あなた方と研究を共にする……」といわれながらも、コンチュウさんほど講義をすつぽかされる先生にお会いしたことは私にはない。なにしろ毎週一回の講座で、月に一回出て来られればいい方で、三ヶ月ぐらいお会いしないときだってあった。

当時（一九五〇年代・昭和二十八年～三十三年）中学校の教員をしながら通っていた私は内心、へ大学の教授なんぞというものはいい気なもんだと反感をもった。しかしそれを口には出さなかった。なぜなら私の周囲の人たちは、講義に出て来られない先生をなぜか当然のように受けとめていて、近藤ゼミナールを「自主ゼミ」と名付け、ゼミの世話係がすすんで先生との連絡をかってでいて、逐一経過を先生に報告し、つぎへの指示を受けて戻ってくるという態勢がカッキリと敷かれていた。

だがボスのいない自主研究というやつは、指揮者のいないへボ楽団みたいなもんで、お互いがただ自分の音を力いっぱい吹き鳴らしてみせるだけで、終ってみればそれぞれに勝手に興奮しあつて、グツタリとなるのがおちであった。二十数年たった今思い返してみても、当時の連絡係のTが冷やかに「君には文学がわからんのだよ」と見下ろすように見た眼の色が忘れられない。今になって思えば、言ったTも言われた私もたしかにへわかつてなぞいなかった。

たらしいようでもあるのだが……。

当時の大学院には近藤先生の他に、西尾実先生や片岡良一先生がおられて、親しく声影に接する幸運に恵まれていた。眼のご不自由な西尾先生は、お嬢さんの山木さんや助手の山下氏が、先生の後ろから手を添えられてゆっくりと階段を登ってこられた。病身の片岡先生は、一階ロビーで休まれると、そこで薬を飲まれた。二階の教室まで登られるのに途中で休まれることが多かった。和服姿で茅ヶ崎から出て来られる先生は、片道だけで二時間はかかると仲間たちがささやいていた。時々現われる近・忠さんはその階段を背をすつと伸ばされて二段ずつ登られた。

ある時先生への連絡係を買って出ていたTが、真剣な表情でこう告げた。「近藤さんが今日はどうしても諸君に聞いてもらいたいことができた。遅れて出席することになるかもしれないが、ぜひ待っていてほしいとのことだ」と、案の定自主ゼミの時間がすっかり終わるころ、額に汗をにじませて、白面長軀瘦身の先生が入ってこられた。われわれを座らせ（といってもいつも七～八人だったが）先生はそのまま立たれている。息をととのえられてから、いつものように長い指を額に当てられながら、つぶやくように話されるのを聞けば、それはいつも耳にたこができるほどお聞きしている先生の持論、歴史の動きの中にことばをおいて読め”といったような趣旨のご発言だった。いい終えてから声をしぼられるようにして先生は、近松の「心中天網島」のいわゆる筋書きを話された。私は驚いた。こ

の作品はもうなん時間もゼミにとりあげて論じあい、誰も知りつくしているはずの、その作品の梗概を説明されだされたのだったから……。しかしいつか私は、先生のことばを通して語られる近松のドラマの展開に、息がつまりそうになるほど感動して聞いていた。

新しいことばをもたないままに教室に出ることを潔しとしない先生は考えておられたのだったろうか。それとも伝えられていたようにお体が悪かったのだろうか。あの頃の先生は確かに語るべきことばだけを極端に寡黙に語られていたという印象が強い。ゼミに同席されていたとき、ただひとこと「ごくろうさん」とだけいわれたときもあった。

まだ因果な教師稼業を重ねて口を糊している私は、今も教室を休まない。伝えるべきことばをもちあわせていない日でも、少しぐらいは熱があっても、時間になれば家を離れる。習慣化されている情性のためである。伝えることもなく苦汁で顔がゆがんでも、こうしているうちには、なにかが発見されないでもなからうという期待感のためにでもある。

先日、近藤先生が最後の教鞭をとられた大学の卒業生の方とお会しする機会があった。「法政時代の先生はよく講座を休まれた」という私の発言に、その方は不思議そうな表情をされた。そして「いや、大変律義な先生でした」「先生の最終講義に、先生は祖父江昭二先生に背負われて階段を降りられました」と語られた。

## 近藤先生の思い出

萩原 一雄

昭和二十六年の春、初めて近藤忠義先生にお目にかかりました。私は前年、県立静岡工業高校機械科を経て法政大学に入学したのであります。当時、法政の教養部は川崎市木月にあり、時計台校舎の他に蒲鉾型の教室が並んで居りました。学生達の多くは東横線の元住吉か工業都市、南部線の武蔵小杉から歩いて通っておりました。学校のまわりはほとんどが畑で、目立つ建物は中原郵便局ぐらいなものでした。喫茶店などは一軒もなく、工業都市駅のガード下のわきに外食券食堂があるだけでした。食堂の飯には三分ほど大麦が混入していました。

私は近藤先生の「日本文芸史」を選択していましたが、これは偶然でした。私は富士見町では英文学を専攻する予定でいたからです。後年の記憶と重なり合ってしまっているのかも知れませんが、その日の先生は紺の背広に痩せた長身を包み、臍脂色のネクタイを着けて居られました。ふと足元を見ますと白のズック靴を履いて居られます。

先生は小さな風呂敷包みと鳥打帽を教卓の上に置かれ、胸をそら